

提言

日本思想史をどう教えるか——一教員の試み——

ケイト・ワイルドマン・ナカイ

今年度の『日本思想史学』の「提言」を書かないかという指名の矢が当たって以来、自分にはなにが言えるのかとずいぶん悩みました。私に依頼が来ると言うことは、おそらく日本思想を何か国際的な角度から考えることが望まれていると思われませんが、いくつかのテーマを思い起こしてみても、それをどういう風に展開すればよいのか、なかなか思い浮かびませんでした。国内と海外の日本思想史についての問題意識、研究の動向を比較することは、自分にとってあまりにも大きな、整理しにくい課題です。あるいは海外の日本思想研究の発展のために、原典や、古典的な、あるいは最近の研究をどういう形で紹介すればいいのか、翻訳の数を増やす必要性、またはそれに関わる問題を取り上げること考えましたが、そ

の話を持ち出すことは、この場よりも海外においてこそふさわしいのではないのでしょうか。

あれこれ思いめぐらしたあげく、もう一回、一昨年ここで「提言」として書かれた平石直昭氏の発言を読み返しました。氏の鋭い文章はまだみなさまの記憶に新しいと思われませんが、あえてここでふたたび紹介すれば、「古典教育と講義の自己点検」と題して日本思想史を教えるに当たっての様々な問題に触れられた上で、「各自がそれぞれの大学で、何年次の学生を相手に、どんな日本思想の講義をやっているのか、その内容を互いに紹介しあう」ことを呼びかけておられました。そこでこの呼びかけに答えて何かを書いてみようと思います。「提言」としての期待には応えきれないと思いますが、日本思想

史の科目を担当する一人の教員として、なにを試みてきたかをお話ししてみよう。平石氏の言葉をもう一度借りるならば、「座標軸の不在」が指摘される「日本思想史」を、系統的に講義すること」の困難さに自分なりにどのようなぶつかってきたかを大まかに説明すれば、そこで直面する問題についての助言を得ることができてもしれません。また、自分が勤務する上智大学比較文化学部においては、原則として授業は英語で行われることになっていますので、講義はいうまでもなく、学生に読ませる「原典」も英語に翻訳されたものに限られています。そこで翻訳の質、数や種類の不足の問題が当然生じてきます。このような特別な環境の中でどのような日本思想史の講義が可能であるかを考えてみることは、あるいは、日本思想史を国際的な観点から捉えることになるといえるかもしれません。

上智の比較文化学部で担当する日本思想史の科目は、三・四年生及び大学院生のための通史で、九十分の講義を週二回、学期を通じて合計二十三から二十六回行います。時代の範囲は八世紀から明治維新までを扱っています。「通史」といっても、「座標軸の不在」という日本思想の根本的性格を考え、均等的、包括的な接近法ははじめから諦めました。それより、範囲の時代を貫く、基本

的と思われるいくつかのテーマに焦点を絞って、そのテーマの展開、いろんな思想家や、原典がそれとどのように関わっているかを比較することをポイントとしています。大げさにいえば、日本思想をフーガのようなものとして捉えようとし、はじめは割とはつきりした主題が関わり合い、反響しあううちにだんだん込み入った、複雑な曲を作り上げるプロセスを追ってみることを目標とします。もっと簡単（そして現実的）に考えれば、時代の中や、時代を超えてのいくつかの対話を描こうとしています。

日本思想という「曲」、あるいはその中の対話を述べるために、主題としての大きな基本的現象と、それを例示する個別テーマとを併せて考える必要があるでしょう。前者としておそらくどなたもがまず指摘される問題は、海外から入ってきた系統的な思想体系との関わり方であると思われる。中国の——広い意味で儒学の——政治思想や仏教の宇宙論の持つ普遍性の力に直面した日本の思想家が、律令時代以来、どのようにこれらに対応してきたかを探ろうとするわけですが、これに当たって少なくとも三つの現象と取り組まなければならず、三つともが「座標軸の不在」という問題と深く関連していると思われまます。ひとつはその普遍性に対して彼らが感じた魅

力と、その影響下で日本の現況をどのように捉え直そうとしたかということでしょう。もうひとつはその作業における強い習合的な傾向、残るひとつは、世界的にみてもかなり早い段階からの民族的意識の提唱ではないでしょうか。

これらの現象を例示するテーマとして、私は主に王権に関する考え、「かみ」の観念や「道」の理念の捉え方を取り上げています。具体的には、フーガの最初の節として、古事記の神代の神話に出てくる天照大神、スサノオ、大国主の逸話を通じて、日本の王権に関する「根元的」観念を描こうとします。その上で、その土台に導入されてくる中国の「普遍的」王権論の日本における行く末を辿っていくことを試みますが、その前に、その王権論の実体を把握するために、尚書の聖王・易姓革命観念を表す逸話をいくつか取り上げます。堯・舜・湯・武・桀・紂のイメージを獲得してから、古事記・日本書紀に戻り、それぞれの神武・仁徳・武烈・継体天皇の描写を比較しながら、中国の王権論の取り入れ方を追求してみます。同じ話の二つのバージョンの違いから、中国的要素がどういうふうに取り捨され、日本における聖王・易姓革命観念がどのようなものになっていくかがよく見えてくるのではないかと思われまます。一つの例を取り上げれ

ば、仁徳は古事記・日本書紀の両方の中で、中国的色彩を帯び、聖王として賞賛されながらも、そこには中国の聖王物語としては考えられない、いく人も女性との恋愛逸話が色濃く残っています。大国主神話を連想させるこの逸話に日本王権観の深層が現れているのではないかと思われまます。古事記・日本書紀はその事情について違う態度を示します。古事記は中国的聖王のイメージとの矛盾を特に問題としないのですが、日本書紀は相反する要素を何とか調整しようとしています。そこに、八世紀から幕末までの日本思想家の中国思想との関わり方を代表する、二つの姿勢がみとれることの理解を目指します。

フーガの二つ目の節として仏教との接触が日本思想にもたらした展開を追ってみます。神仏習合の影響下に起こった神観念の変化、愚管抄と神皇正統記にみられる政体のありかた、歴史の動きに関する考えの新しい方向性、中世神道が表す自国意識の新たな主張——それぞれに仏教の独特な普遍性がもたらした思想的発展や可能性が読みとれるのではないのでしょうか。別な言い方をすれば、仏教の宇宙論との接触によって、日本の思想家が世界における日本の位置、自国の実体と普遍的原则との関係を考えさせられ、その経験から自国のことをも、中国文化の重み——特にその華夷思想的傾向——をも相対化する

可能性が生まれ、反対に日本の存在や、その特徴を強調する動向も発生したことを確認します。

中世思想がこのように、仏教の普遍性との交渉の場において進展したとすれば、近世思想を探究するには、これを再び中国思想——特に儒学——との関係において捉えなければならぬでしょう。日本思想のフーガの三つの節ではその関係がメインテーマとなり、これを描くためには、中国儒学の新たな展開——つまり宋学の浮上——にも目を向ける必要が生じます。儒学思想の役割が大きくなるにつれて、日本の事情と中国理念とのずれから起る緊張感も強くなります。それはたとえば、儒学の一元主権論に照らされた朝幕関係についての考え、あるいは「神道」の定義や捉え方に現れています。また、荻生徂徠らによって儒学そのものの前提が考え直され、その反響として、国学の儒学批判が起り、自国の「道」が再定義されますが、これを普遍性との絡み方として、今までなかったモチーフが日本思想の「曲」に織り込まれるようになると捉えることをねらいます。

日本思想史の教え方として、これを一つの「曲」の発展としてこのように追ってみることは、長所もあれば、問題もあります。後者として二、三を挙げれば、日本思想をその影響を受ける外国思想との関係において捉えよ

うとすることは、日本思想の展開以外に、外国思想の発展もカバーしなければならぬことを意味します。そうするには、どのように時間を割り当てればいいのか。中国思想を例に取れば、律令時代の王権論の進展を理解するために尚書を取り上げ、徳川時代の思想的事情の背景として宋学の形而上学、修養論に触れています。しかし、その間の千年以上の知的変遷についての知識がなければ、儒学伝統における宋学の意味を分けることができるでしょうか。また中国思想をこのような単純化された形で了解させるならば、中世・近世思想に影響を及ぼした道学的宇宙論をどういう風に設定すればよいでしょうか。日本「思想」（とりあえず「宗教」と区別してみたいのですが）と仏教との関係を適切に把握することはさらに困難を伴います。特に、学生にとって比較的理解しやすい仏教の基本理念を表す、適当な資料が見つげにくく、「原典」をなるべく読ませるといふ原則を守ることはできなくなります。同じことが仏教の影響下に発達した中世神道についてもいえます。近世思想の特色を分かるためには、中世神道の発展事情を見落とすことはできないと思われませんが、現代の学生にとつて、その様態は確かに接近しにくいものです。

しかし、このような問題があり、また完全な曲として

日本思想のフーガを描くことはできなくても、異なる知的伝統や時代を超えた対話を追究することには意味があると思われます。その作業によって学生も、教員も、思想を絶えず変成していく生きざまのものとして捉える可能性が大きくなるのではないでしょうか。そのこと自体が、一昨年平石氏が切実に訴えられた問題——大学における日本思想史の市民権をどうすれば獲得できるか——への解決の一つの小道を開いてくれるかもしれません。

(上智大学教授)